アスカ物語

～夢のかけら～

塚越広治

　その星は、ひときわ大きく青く輝いて、幼いアランにも、数多くの輝きの中から一目で見分けることが出来た。しかし、傍らの老人たちが見上げるものが、地球という星ではなくて、生まれ育った思い出だと言うことを、彼は幼いながら理解している。
「おお、アラン。ちょっと見ない間に大きくなったな。幾つになった？」
　マレンゴ爺さんは節くれ立った大きな指でアランの頭を撫でて、過去に何度繰り返したか分からない質問をした。だから、アランの答えはいつも同じ。
「五歳だよ」
「五歳？　これは成長しすぎだな」
　マレンゴ爺さんは地球の子どもを基準にアランを眺めていた。いつものことで、アランはその冗談を訂正しようとは思わなかった。アランが言った五歳は火星の年月。地球の歳に換算すれば、彼は間もなく十一歳になる。低重力の影響で、同じ年頃の地球の子どもに比べると身長がやや高い。その分、肩幅が狭く華奢に見える。マレンゴ爺さんの厚い胸板と広い肩幅は、地球で生まれ育った人のものだ。２つの星は人類の外見すら分けていた。
　アランの視線は空を離れて地平線を泳いだ。砂嵐が去って澄んだ地表の端に、黒々となだらか見える隆起はエリシウム山麓である。手前に視線を移せば、都市の周辺に白煙を吐く噴気口がある。都市機能を維持するエネルギー源の廃熱を、地中のドライアイスを溶かして排出しているのである。老人たちが築き上げたこの都市が、火星の大地で人と共に息づいている証拠だった。
　マレンゴ爺さんたち老人は、この場所を展望室と呼んでいた。この町の南の外壁に接する区画にある公園で、都市を覆う白い外壁がこの箇所だけ透明になっていて、外の景色を眺めることが出来るのである。公園には幾本かのヒマラヤスギが地球から持ち込まれて久しい。この地に根を張り、尖った葉を茂らせてるのだが、季節のないこの星と都市の中で時を止めたように、年輪を刻むことが無くなった。老人たちはそんな樹木の傍らのベンチに腰掛けて、透明な天井を通して夜空を眺め続けている。
「いいかい。私たちはあそこからやって来た。いつかあそこに戻るだろう」
「せっかく来たのに？」
　老人たちの言葉にそう問い返すアランの肩を抱いて引き寄せたのは、この都市を造り、子どもを育てた人物の手である。アランはその人物に、大切なものを残して地球に帰れるのかと問うたのである。
「あれは私たちの根っこだ。樹は枝を伸ばし葉を付ける。時が来て役割を終えた葉は散

り落ちて土に戻り、次の葉の養分に変わる」
　老人たちの言葉の言い回しは、アランには難しすぎてイメージがわきにくい。アランは膝に置いた玩具を眺めた。こちらの方がアランにとって現実的なイメージを伴う夢である。彼はこの玩具を通して宇宙を夢見る。
「アランは、いつもアスカに夢中だね」
「うんっ。みんなで作った船なんだ」
「そうだな。わしはこの街の外壁も作ったが、アスカも作った」
　昔、建築素材を扱うメーカーにいたという経歴を持つマーが自慢気にそう言った。
　アランが手にするアスカという小さな宇宙船の外板に、都市の外壁を作る技術が生かされていると言うことである。笑い話のように語られる事実だが、そういう事実が無数に積み重ねられたこの船は、火星の人々の技術の結晶と呼んでも良い。高出力のエンジンが得られなかった彼らは、避けられない妥協策として、セミモノコック構造による軽量化を選んだ。各種のモジュールを頑丈なフレームで支える従来の構造に変えて、柔軟性を秘めた強靭な外皮で船にかかる荷重を支えた船である。
　このいじましいほどの微笑ましさが、アスカの鳥のようななめらかな曲線を持った外形を生み出した。火星の人々によって作られたばかりではなく、彼らの人生すら反映する船である。その姿は儚く美しい。しかし、都市やアスカを作った老人たちにはこの土地の時間ではなく、地球の時間が流れているとアランは考えていた。
「お婆ちゃん」
と、アランは隣の老人の上着の裾を引いた。今のアランの目的は祖母を夕食の席に連れ帰ることだ。
「早く帰ろう。エリーが来るよ」
「そうだね」
　ここで思い出に浸って、気分を落ち着けた後のお婆ちゃんは物わかりが良い。アランは右手にアスカ、左手に祖母の手を握って立ち上がり、周囲の老人たちに別れの手を振った。老人たちも会釈や手を振って応じた。
「風邪を引かないよう注意するんだよ」
「またおいで」
「次はガールフレンドを連れてね」
　思い出話を聞かされるという経験を繰り返して、アランはこの老人たち名前や顔だけではなく一人一人の人生の一端を共有していた。

「こんにちわ。アラン」
　エレノアは優しく笑って、帰宅したアランの肩を抱いた。出征した兄が帰ってきて結婚すれば姉になる女性を、アランは親しげにショートネームで呼んだ。
「ようこそ。エリー」
　彼はエリーの体温を感じながら思った。
（きっと、この人はティムの存在をボクに求めている）
　エリーは視線をお婆ちゃんに転じて挨拶をした。
「こんにちは、」
　アランはお婆ちゃんの耳元で、（ティムの婚約者のエリーだよ）と囁こうとしたのだが、今日のお婆ちゃんはちゃんと覚えていた。
「よく来てくれたね、エリー」
　アランはそんなほのぼのした雰囲気の隙を狙って二階に駆け上がり、戻ってきたときには、その手からアスカは姿を消していた。
「アラン。台所のサラダの皿を運んでちょうだい」
「うん」
　一階に戻ってきたアランは、母親の指示に従って料理を食卓に運んだ。四人で食卓を囲んでみると、仲の良い家族の景色になる。自分の分を取り分けたエリーが、アランに回してくれた大皿に入ったサラダ受け取って、アランはこの食卓を囲む一員である嬉しさで笑顔を浮かべた。他の三人が浮かべた笑顔も、アランと同じ感情だったに違いない。
「みなさん。新しいニュースがあります」
　どこからともなく部屋に響くのは、思考ロボットと呼ばれるダニーの声である。ブルドーザーやパワーショベルの姿を持った土木工事用ロボット、どうみても事務用の机にしか見えない事務作業ロボット、家庭でのお手伝いから子守を担う人型のロボットまで、仕事の数だけロボットの姿が分岐した。この時期、そこから、インターフェース部分のみ独立して人に従属したのである。仕事によって人に都合の良い形態を取る。今のダニーはこの家の環境維持システムに常駐して空調管理から風呂の準備、果てはアランを寝かしつけるために子守歌まで歌う。夜が明ければ電気自動車のシステムに転送されて電気自動車の姿を取ってアランを学校に送りもするのである。生真面目な男性の人格を持ち、この家の人々に仕えている。
　ダニーは会話の中からこの一家の人々の性格や嗜好を学び取り成長する、彼はこの一

家に、何かの変化をもたらすかもしれないニュースをキャッチしたと知らせたのである。
「いいわ、教えてちょうだい」
「では、モニターに流します」
【統合参謀本部　定時発表
　我が解放軍は　敵前線基地アコンカグヤ攻撃を決行せり。
　判明したる戦果、
　敵前線基地を使用不能の損害を与え、付随する艦艇の一部に重大なる損害を与えた模様。
　我が方の損害は、
　主力攻撃機アスカ１６８機を損失、支援艦艇２隻沈没、
　現在の所、更なる詳細は調査であります】

　戦略的に語れば、連邦軍が地球の衛星軌道上から古い衛星都市アコンカグヤを牽引してきて火星の公転軌道に近い軌道に乗せていた。火星攻略のための足がかりになる敵補給基地に対して、火星解放軍はアコンカグヤを無力化するために攻撃をかけたと言うことである。
「もういいわ、止めて」
　マーガレットの叫ぶような声に、ニュース映像はモニター上に映し出された美しい外形を持った小型船の映像を静止させて消えた。アランはあの美しい船が兄が乗るのと同じアスカと呼ばれる小型の宇宙船だと知っていた。一瞬の沈黙の後、凍り付いた表情を笑顔に変えたエリーが話題を深皿のシチューに向けた。
「美味しいわ。独特のコクというか、ほのかな甘みがあって･･･」
「知りたい？」
「教えて」
「一つかみのレーズンを良くすり潰して入れるの」
「なるほど、レーズンの甘みと香りなのね」
「私もこの家で義母から習ったの」
「ラッセル家の母の味という訳ね。私もこの味が出せればいいな」
　料理の隠し味について、祖母から母に、母からエリーへとささやかな伝統が引き継がれてゆくのである。食卓からものの見事に戦争の気配は消えて、微笑ましい食事の景色に戻っている。アランは女性たちの会話が弾んでいる隙を狙って、スプーンでニンジンを突いて皿の端に寄せた。

「ティム、残さずちゃんと食べるんだよ」
　お婆ちゃんがそう言った。普段はぼんやりしているのに、こういう時だけは目ざとい。ただ、アランと兄のティムの区別がついていない。そのティムは、母親の言葉によれば、生まれ故郷を大きく離れて、アスカと共に小惑星帯にいる。
　食事の後、母親のマーガレットは再び展望室へ行こうとする義母をなだめて、明日の夕刻まで延期させた。食事の後片付けを手伝うエリーは、既にこの家族の一員のようにとけ込んでいて違和感がない。アランは何やらぶつぶつ文句の多いお婆ちゃんを部屋に連れて行った。アランは幼い頃のティムになって祖母の話し相手を務め、過去に何度か聞いた思い出話をいくつか聞いた。思い出話をする祖母の相手が、ティムから少しづつお婆ちゃん自身の心に向いて、発する言葉が無くなった時、アランは祖母の世話を思考ロボットのダニーに任せることにした。ドアの外に出てそっと中を振り返ってみると、ダニーは照明を少し落とし室温に気を配り、ほんのりと香るバラの香りと、お婆ちゃんのお気に入りのワルツで部屋を満たしていた。
　アランが居間に戻ってみると、母親が一人いたきりでエリーの姿がない。見回すとエリーのバッグは居間に残されたままで帰宅した様子もない。アランはこの状況に少し眉をひそめながら階段に足を向けた。
「アラン」
　母親が息子の名を呼び、目配せをして、エリーをそっとしておいてやりなさいと指示した。アランは頷いたが、この不都合な状況に、戸惑う視線を階段の上に向けた。階段を登りきって左がアランの部屋、右が兄のティムの部屋である。
　開けっ放しになっていた右のドアから、中をそっとのぞき込んでみると、ベッドに腰掛けて無言で部屋を眺め回しているエリーの姿があった。
「エリー、ちょっと入って良い？」
「なあに？」
　アランはエリーが腰掛けていたベッドの下を手探りして、帰宅直後に母の目から隠した玩具を引っ張り出した。
「ここ、ボクの宝物の隠し場所なんだ」
（なるほど）と相づちを打ちたくなる思いでエリーは微笑んだ。
　自分の部屋なら、散らかしていれば母親に片付けられたりする。隠している宝物を見つけ出されることもあるだろう。しかし、この部屋なら、この子の母も祖母も、思い出と共に大切に状態を保管して触れることはあるまい。アランにとって安全が約束された隠し場所なのである。

「アスカね」
　エリーはアランが手にした玩具の鳥のような外形を見てそう言った。
「うんっ。ティムが休暇の時にプレゼントしてくれたの。ティムが乗っているのと同じ型なんだ」
「男の子は幾つになってもそういう玩具に夢中ね」
「ボク、大きくなったらアスカに乗るんだ。エリーとボクだけの秘密だよ。ママが聞いたら反対するから」
「だから、隠してるのね」
「早く乗りたいんだけど、ボクはティムよりずっと子どもだから」
「まだ時間がかかるのね」
「そう、ティムが言うんだ。『お前は父さんの三度目の航海の子どもだから』って。分かる、この意味？」
　首をかしげるアランに、エリーは屈託無く笑った。まだアランの歳では分からないかもしれない。地球にせよ、火星にせよ、エネルギーの資源の大部分を木星に頼っている。アランの父親は木星航路の輸送船の乗組員だった。往復に３年は要する航海で、長男のティモシーの誕生の後、三度の航海を経て帰港したときに夫婦が授かったのがアランである。そして、四度目の航海の事故によって、この一家は主を失っていた。アランには父親の記憶はあるまい。あるとすれば、年の離れた兄に父親のイメージの一部を感じ取ることぐらいだろう。
「ティムも、子どもの頃は宇宙船の夢を見ていたんだって」
「いま、私とお話をしているのは、小さな頃のティムかもしれないわね。今日はアランと話せて本当に良かった」
　一家にとって平凡な一日が終わり、エリーが帰宅する頃になると、アランは宿題が気になりつつ眠気に襲われる。
「アラン。宿題はすんだのかい？」
　勉強机の前のアランにそう声をかけたのは、思考ロボットのダニーである。もちろん今はこの家と一体で、姿らしきものはない。
「ダニーって、ボクのパパの名前をもらったの？」
　アランはベッドにぽんと寝っ転がって腕を枕にした姿勢でそう聞いた。
「アランのお母さんに聞かないと分からないね」
「パパがいたらきっと、ダニーみたいだと思うよ」
「光栄だ」
　ダニーの心遣いは本当の父親のようで、声のトーンがアランの眠気と共に低くなり、

最後に一言言い添えてこの部屋から消えた。
「宿題がまだのようだから、明日は早めに起こすからね」
　アランの母は、夫を亡くして以来、一人でティムとアランの二人の息子を育て上げた。この気丈な女性が、思考ロボットに亡くなった夫ダニエルの愛称を付けて心の支えにしたのかどうか、問うても答えることはないだろう。

やや薄暗かった街の中の照明が、日の出と共に明るくなると、この町の人々は一日の始まりを実感する。母親のマーガレットは自ら息子のために朝食を作った。物資の統制でじゃがいもが手に入らず、キャベツやニンジンにジャガイモのデンプンを加えてミルクで煮た粥である。アランは文句も言わずにそれを食べ、友達と誘い合って登校した。
「また、あいつ、お前を見てるぜ」
アランにそう囁くクラスメートのボビーの視線の先に優等生のミッシェルが居たが、今のアランは、子ども同士の人間関係には余り興味がない。
クラスメートの大半は両親が居り、子どもは父親の顔と体温を記憶していた。そういう事実に目を向けたとき、アランは父親と重ねて、悲しみのない死のイメージを作る。しかし、最近のアランに、もう一つの死のイメージが出来上がっていた。ミッシェルがアランの視線を追って指さす先に黒塗りの自動車がある。
「あっ、また・・・」
漆黒の自動車がある家の戸口に留まる。黒い制服の人物がなにやら封筒を手にしている。その人物の一挙一動を、家人はカーテンの陰からのぞき見るように追っている。そして、制服の人物がいよいよ自分の家にやってきたことを知ったとき、ドアを開けた家人は玄関で泣き崩れるのである。
アランは目の前で起きている出来事を何度か目にして、その後、その家から葬儀を出すことにも気づいている。アランのクラスメートにはあの黒服が、悪魔のごとく邪悪で、死神のごとく冷徹な妖怪だと語る者も居た。しかし、アランはあの制服の人物が残された家族に戦死通知を届けているのだと気づいている。
もともと軍という組織を持たなかった火星行政府には、大勢の家族に戦死を通知するという行政上の仕組みはなかった。その手続きの必要に迫られたとき、この星の人々は一編の通知を送るのではなく、軍の関係者が家族の元に届けるという古くさい仕組みを作り上げた。事故であれ、戦いであれ、この星のために命を投げ出した人物には敬意を示さねばならないという心遣いである。
あの車がアランの家にやって来たのは五ヶ月程前のことである。
「ティモシー・ラッセル一等航宙士のご家族の方ですね？」
母がドアを開けたとき、一人の黒い制服を着た年配の女性が礼儀正しく、戦死者との関係を確認した。アランは絶句する母の背後に寄り添って、その女の一瞥を浴びた。決して邪悪でも冷徹でもなく、敬意と慈愛と憐憫に満ちた目だった。アランの母は気丈にも泣き崩れはしなかった。ただ、通知の受け取りを拒否しただけである。

　アランたちはここ二週間の間にあの自動車を二度も目にしていた。大人たちは、先般の解放軍のアコンカグヤ攻撃の際に発表を遙かに上回る死傷者が出たのだろうと噂しあっていた。子どもたちはこの町の微妙な変化を肌で感じているのだが、教師たちは以前と変わらず、解放軍の軍律を持ち出して宿題を忘れた子の怠慢を叱り、元気のない子どもを前線で戦う勇敢な解放軍兵士を例に挙げて励ました。学ぶ内容は変わりないのだが、大人たちの不安や混乱が、そんな形で子どもたちの中に入り込んでいた。この日も最後の算数の授業が避難訓練に置き換わったことを除けば、子どもたちは日常の日々と変わりがないスケジュールを終えた。
　大人の思惑はどうあれ、町の子どもたちはアコンカグヤという名を繰り返し耳にして、その名を連邦軍基地として覚えていた。今も下校途上の子どもたちの脇で町の中心部に設置されたモニターがその名を伝えていた。
【タルシスＴＶより、定時ニュースをお伝えします。解放軍統合参謀本部は、火星公転軌道付近に展開する連邦軍のアコンカグヤ基地が、機動部隊主力の補給を終え、出撃体勢整えた模様との発表を行いました】
　子どもたちが記憶したアコンカグヤは、火星攻略の足がかりの整備補給基地としての機能を整え、やがてやってくる陸戦隊の出撃や編成の根拠地ともなる。陸戦隊の攻勢前に、既に入港して整備を終えたフリゲート艦隊の来襲が考えられる。戦火はアランの兄のティムが戦っていたという小惑星帯を離れて、火星市民に近づきつつあった。
　教育を制度として語るなら、アランたちは火星の暦で６年間の義務教育を受ける。子どもたちの登下校の姿は、重い教科書やノートの持ち運びが無くなったことを除けば、数百年も昔の地球の子どもたちと変わりない。そして、親が子どもの宿題に頭を悩ませるのも同じ。
「アラン。宿題はちゃんと済ませたの？」
　帰宅した息子が身軽な姿で家を飛び出そうとしているのをめざとく見つけた母親はそう言った。
「帰ってからするよ」
　子どもがする言い訳も２００年も前と変わりがない。習慣は人々と共に火星にやってきて、しっかりこの地に根付いていた。
　アランが住む町は人口３万人程。シャクルトン市とサモア中継所を結ぶ１１８号線沿いにあり、他の都市に比べるときわめて小さい。１１８号線の補修や道路に沿って施設された通信網の維持整備の仕事を除けば取り立てて産業らしいものはない。だから、住民はここで生まれて、出て行く。アランはそんな町の中を緩やかに駆けて展望室に向かった。

「どうして？」
　展望室にやってきたアランは、自分以外の子どもには縁の無さそうな場所に、優等生のミッシェルが居るということに疑問を呈した。ミッシェルは言った。
「だって、先生から、この町のことを調べなさいって言われてるでしょ」
　アランが少し首をかしげる様子を見た彼女があきれた。
「あなた、、、宿題のこと忘れてるんでしょ」
　そう指摘されると僅かながら、下校の後の遊びを考えているときに先生がそんなことを語っていた記憶がある。
「名案だね」
　アランは素直にそう言った。ここは正面の透明な壁面がある他、周囲には東西や北の景色を映し出した全周モニターがあり、この町の立地条件を眺めることが出来る。僅かながらここを訪れる住人のために案内板があり、この町の簡単な歴史が記載されている。この町を調べるには絶好の場所に違いない。ミッシェルは目ざとくこの場所を見つけていたのである。
「いいわ。私、手伝ってあげる。あなたがここのことを書きなさい」
「君は？」
「私はもう図書館と市役所の資料室を回って調べてあるから」
　彼女は基本的な調べ物はすませて、最後の仕上げにここにやって来たというのである。なんという用意周到さだろう。アランは彼女の真面目さに舌を巻いたが、彼女の真面目さが今はアランに向いている。彼女はアランに宿題をさせるつもりなのである。老人たちはアランを捕まえて思い出話をすることもなく少年少女の関係を優しく見守っていた。彼女は周囲をぐるりと指さして、エリシウム平原の地形を教え、案内板に導いて町の歴史について指導した。
「ここは１１８号線建設の基地だったから、この町の歴史の方が古いのよ」
　ミッシェルは勉強熱心ではない同級生に、案内板に記載された最後の行について指導し終えた。彼女の言葉は優等生らしい確信に満ちていて、アランは言葉を挟む余地がなかった。
「ヘカテストロスはあっちよ。間違わないでね」
　ようやくアランを解放する気になった彼女はこの町の地理について、山の方向を指し示し、念を押して駆け去った。彼女はアランと違って、まだまだやらねばならない勉強がある。
　アランは背後の老人たちを振り返って、黙って肩をすくめてみせた。老人たちの良い

点は、人を身分や知恵で上下に隔てることはないと言うことだ。この場合も、アランを一人の親友として扱って、マレンゴ爺さんは年長の男性として語りかけた。
「歳を取って良いと思うことは、物事を見る目が確かになることだな」
　彼はアランに何かを示唆するようにウインクして続けた。
「あの子は、気だて良しのいい奥さんになる」
　奥さんというキーワードがアランの心を刺激した。母の姿が浮かび、兄と結婚するはずのエリーの顔が浮かんだ。ただ、結婚というイメージが儚くて、ミッシェルをその対象として感じることは出来ない。
「結婚？　でも、ボクには出来そうにないよ。ボクはアスカに乗るんだ。誰かを悲しませたくはないんだ」

　この小さな町は、人の通過点に過ぎないという理由で、悪意のある思想は人と共に流れ去って、戦時下であるにも関わらず、人々の心の静けさが保たれていた。ただ、戦局の悪化と共に、不満や不安、混乱が心の中に淀んで、歪んだ愛国心として吹き出す。地球排斥や火星への忠誠と服従を叫ぶ人の群れが生じていた。
「我々は火星市民の自由を死守する」
　推測を交えて判断するなら、そういう意味の言葉になるだろう。街宣車両から発せられる音量は大きく、歪み、雑音も混じって意志を正しく伝えることが出来ないが、彼らはそれを顧みる様子はない。彼らが何かを口から発する目的が、意志を伝えることではなく、他者を威嚇し、優越感に浸るためだということだろう。
　更に、彼らには難解な言葉や言い回しを使って自らを飾る癖があり、アランたちには意味が理解できず、耳を覆いたくなる雑音に、下校途中の小学生たちは耳をふさいで迷惑そうに顔を見合わせた。
「我々の汗と血でこの大地を更に赤く染めてこの大地を地球連邦の圧政から解放し、」
　子どもたちはそんな言葉を残して走り去る街宣車両を見送った。
「うちの父さんが言ったんだけど、奴らの血や汗で汚さなくてもこの星は綺麗な赤い色だってさ」
　クラスメートのボビーの言葉に同意してくすくすと笑いあった。道が校区を抜け、緊急時には閉じられる巨大なシャッターがついた通路を通って行政区画を抜けるとき、アランは集団の一人、ミッシェルの態度が気になった。何かを思い悩むようにちらちらとアランに視線を送ってよこすのである。居住区画に向かう通路を抜け終わると、いよいよ住居の方向は分散して、集団はバラバラになる。集団から離れ無くてはならなくなったとき、ミッシェルは立ち止まり、はにかんだ笑顔で、不意にアランの手を取って誘った。
「ねぇ、アラン。面白い映画があるの。うちで一緒に見ない？」
　アランは生真面目に考え込み、決心したようにため息と共に言葉をはき出した。
「だめなんだ。今日は展望室にお婆ちゃんを迎えに行かなきゃ」
「アラン。あんたって、若い子より年寄りが良いの？」
「うん。わかんないよ」
「あんたなんか大っ嫌い」
　アランは困った表情で、走り去るミッシェルの後ろ姿を見送った。
　その一時間後、アランはミッシェルに語ったとおり展望室にいた。ここから宇宙を眺

めてアスカを思うことなのか、ここの老人たちと人生を共有することなのか、町中の不安や怒りの混じった戦時下の雰囲気を避けているのか、この展望室にやってくる目的はアラン自身にもよく分からない。ただ、独特の居心地良さがアランをこの場所に引きつけるのである。
　その居心地の良さをかき乱す存在が現れた。火星解放戦線と称する者どもが軍服を模したおそろいの衣装で、人数と怒号で周囲を威圧しつつ現れた。その視線と隊列が老人たちに向いていた。
「地球に未練を抱く爺どもには、火星市民としての誇りはあるまい」
　リーダー格の若者がハンドスピーカで罵声を振りまく姿と、静かにそれを眺める老人たちを、彼らの仲間が中継するようにカメラを構えて映していた。自己宣伝の手段としてこの光景を各地に配信しているのだろう。そのカメラが被写体としてアランを捕らえた。子どもを通した映像は人々の共感を得やすいに違いない。集団のスポークスマンらしい女が、アランに寄り添ってカメラを意識しつつ語りかけた。
「ねぇ、ボク。このおじいちゃんたちに、何か地球のことを吹き込まれているの？　ほらっ、火星は地球よりみすぼらしいとか」
「それって、なあに？」
　女はアランが自分の質問を理解しなかった様子にやや腹を立てて続けた。
「坊やは、地球が大好きな裏切り者じゃないわね？　火星のために働きたいと思わない？」
　その質問に、アランは素朴な疑問を呈した。
「マレンゴおじいちゃんたちはこの町を作ったの。みんな何かを作ったのに、あなた達は何をしているの？」
　彼らの驕慢さと自信はリアルタイムでこの映像を配信している。アランの疑問と疑問に戸惑う彼らの姿は、既に各地に配信されているだろう。
「このガキは。連邦の思想に毒されている」
　アランの襟首をつかんで持ち上げようとした男の手首を、マレンゴの手が包んだ。長年、建設労働者を勤め上げた人物で、その筋力はまがい物ではない。男は手首の骨を握りつぶされるのかと哀れな悲鳴を上げた。
　マレンゴは静かに言った。
「この子の父は火星のために命を尽くした。この子の兄はアスカ搭乗員を志願して小惑星帯に渡った。火星市民の誇りは生き様で表すものではないのかね。臆病者の弁舌で火星市民の誇りを汚すものではない」
　ポッターお婆ちゃんが笑顔でマレンゴの言葉を継いだ。

「私はここで長年子どもたちを教えてきたけれど、あなた達程、できの悪い子は居なかったわ」
　その言葉に、長年ここで生きてきた人の存在感がある。
「我々、火星解放戦線のメンバーは連邦の圧政と、火星における裏切り者の存在を断固許さない」
　彼らが幾分利口であったのは、老人たちの人生に、彼らの言葉の勇ましさでは抗し得ない事を悟ったことだろう。彼らは矛先を転じ、捨て台詞のように勇ましい言葉を並べながら去った。
「アラン、よく言ってくれたね」
　マー老人に頭を撫でられながら、アランは周囲を見回して素直に言った。
「みんな、凄いんだね」
　徒党を組んで勇ましい言葉を吐く集団より、老人たちの人生が背負ってきた重みを感じたのである。
「今日はあの子は見かけないが」
「ミッシェルのこと？」
　アランが悩む様子を察したポッターお婆ちゃんが気を回してたずねた
「あの子とケンカでもしたのかい？」
「知ってる？　女の子って難しいんだ。特に、年頃の子はね」
　そのため息をつきながら呟くアラン言葉に、老人たちは声を上げて笑いあったが、アランにとって不快ではなく、老人たちにも心地よい。この少年は老人たちに幼い頃の自身の姿を映して見せてくれるのである。

「準備が出来たから、お婆ちゃんを呼んできて」
いつもはアランよりずっと早起きのお婆ちゃんが今日は起きてこない。朝食のテーブルについていたアランは、コップにオレンジジュースを注ぐ母親の指示で奥の部屋に姿を消した。
「お婆ちゃん。ボクはアランだよ」
家の中に響き渡る息子の声に、何かの異変を感じたマーガレットは、義母の部屋に駆けつけた。穏やかな笑顔を孫に向ける義母の姿は微笑ましいのだが、発する言葉にぞっとする違和感がある。
「ダニー、何を言ってるの？」
「お婆ちゃん、ボクはアランだってば」
「お義母さん、どうなさったの」
「あら、新しいベビーシッターさんね？　今日は良いのよ。私が息子のそばにいますから」
「お義母さん」
マーガレットは、来るべきものが来たという達観で言葉を失った。義母は息子と孫の区別もつかず、嫁の自分のことも忘れてしまっているのである。マーガレットはエプロンを脱ぎ、思い詰めた目でアランを見つめて言った。
「今日、ママは帰りが遅くなるわ。お婆ちゃんを連れてシュワルツ先生の所に行くから」
「うん」
アランの前にいるのは、ここのところ、アランとティムの二人の孫を間違えた祖母ではなかった。精神科医シュワルツ医師の患者であり、この火星にやって来てから４０年の記憶を封じ込めてしまった老人に過ぎない。医師に連絡を取る母の傍らに、現実離れした幸福そうな笑顔を浮かべている祖母がいる。今の自分はお婆ちゃんに寄り添っても慰めにはならず、母にまとわりついても手助けにはならない、今の自分に出来ることを。アランというのはそんな物の考え方をする男の子だった。彼は黙って、そういう景色を背にして家を出た。
「アラン・ラッセル！」
授業も聴かず、ぼんやりと外を眺める生徒に、女教師の叱責が飛んだ。さすがに三度目になると、教師の失望の声音に怒りが混じるようになる。普段から授業中に空想に耽っている子だが、いつものことだと寛容的になるには、今日のアランはあまりにも授業

に無関心すぎた。斜め前の席から振り返ったミッシェルが、そんなアランを眺めていた。唇を結び。頬をぷっと膨らませて眉をひそめて見つめる様子は、優等生が不真面目な生徒に投げかける表情ではない。不満と心配、戸惑いに混じってその隙間から好意がにじみ出している。そんな彼女は火星生まれとか優等生という特別な存在ではなく、昔からどこにでもいる思春期の女の子である。アランはミッシェルに気づきもせず、一人つぶやいていた。

「マレンゴ爺ちゃんたちに知らせに行かなきゃ」

　下校時間、学校の区画から南へ５分ばかり駆けると町を貫く１１８号線があり、立体交差の下を抜けてしばらく歩くと、町と公園を隔てる遊歩道の隔壁にたどり着く。公園に沿って伸びるトンネル状の遊歩道の突き当たりにあるシャッターをくぐれば公園の中である。町に面する壁面には町の地図や官公庁の利用案内、緊急時のシェルターの利用方法を記載したパネルの他、この町の歴史を示す写真が掲示されていた。公園に面する壁面には幾つかの四角い大きな窓があり、遊歩道の中から公園の中を眺めることが出来た。アランはその窓の一つの前で足を止めた。もちろん、まだ陽は高く、昼間の空の明るさが公園の中を満たしていた。地球の人々が母星の空を海の青さに例えるなら、火星の人々はこの空の色を真珠の色に例えている。素朴な温みを感じさせる色である。その光の中で老人たちがたたずむ姿が窓によって四角く切り取られ、１枚の絵のように見えたのである。

　しばらく間をおいて、アランは再び駆けだして遊歩道端のシャッターを抜けた。いつもより早く、一人で公園に現れたアランに、老人の一人が尋ねた。

「サマンサはどうしたんだい？」

「みんなのこと、全部、忘れちゃったの」

　アランの一言で老人たちは事情を察した。アランの言葉が涙に変わる前に、ナターシャ婆ちゃんがアランの唇に手を当てて、代わりに言葉を紡ぎ出した。

「そう。サマンサの心は、先に地球に帰ったのかもしれないね」

　その言葉に、アランは反論したい。しかし、それを表現する具体的な言葉が見つからず、断片的な思いを心の中に広げた。

（でも、本当の笑顔なんだよ）

　祖母の笑顔は澄んでいて濁りがなかった。あの笑顔が祖母の人格が抜け去った残渣だとしたら祖母がここで生きて残したものは何だろう。アランは立ち上がった。

「また来るよ」

「そうだね。今日はサマンサのそばに居ておやり」

「うん」

　同じ頃、アランの家では思考ロボットのダニーが行政区から市民に発せられた緊急ニュースを報じていた。
【解放軍統合参謀本部発表
　敵前線基地アコンカグヤに駐留する敵艦隊は出撃の準備を整えた模様。我が方はフォボス、ダイモス基地に展開する軌道艦隊がこれを迎撃、撃破すべく出撃体勢に入りました。】
　そんなニュースをこの家の人々は聞いていない、心の底に長子のティモシーが小惑星帯で戦っているという意識があり、遠く距離を隔てた戦場を身近に感じるのである。ここのところ騒がれるようになった連邦軍基地アコンカグヤというのは、寝耳に水のような感覚があって実感として感じていないのである。
　もともと奇妙に見える戦場だった。自治権拡大を叫んで始まった運動が激しい独立運動になり、それは発火して拡大した。その火種は連邦軍がテロ事件を巡って火星の警察権力に介入したという、政治上は些細な物だが、両勢力の面子に大いに関わった。火星軌道近傍で、両勢力の衝突が潰えて僅かな安息の時間を迎えた。しかし、互いの星を直接に攻略する足がかりはなく、エネルギー資源の枯渇を目的に互いの木星航路の遮断を計り、当然のように、かつ、一般市民にとって意外にも、戦場は両者の間から小惑星帯に移動した。互いの命をすり潰す凄惨な戦場に数多くの兵士が送られ、この一家の長兄のティモシーもその一人だった。残された家族はここにいる。しかし、祖母のサマンサの記憶は遠く彼方に去ってしまったようだ。
　今ひとつ、別れの話が生じていた。エリーがマーガレットのもとを訪れたのである。
「そう、帰るのね」
「ええ、明後日のバスでこの町を発つつもりなの」
「いつでも帰ってきてちょうだい。ここはあなたの家と同じだから」
　事実、マーガレットがエリーを抱きしめる様子は娘を抱くのと同じ優しさを持っていて、エリーが浮かべるのも家族との離別を悲しむ涙である。この時に、玄関先にドアの開閉音が響いた。アランの帰宅を察したエリーはマーガレットに尋ねた。
「ティムのことは？」
「あの子にはまだ話してないの。だって、あの子にとって父親も同然だから」
　彼女は息子のティムの戦死通知の受け取りを拒否している。小惑星帯という遠く離れた戦場で戦死をしたと言われても信じがたく、この家に残るティムのものは生きているティムの思い出そのもので、遺体すらない死の通知より遙かにイメージが強いのである。死んだと思われていた兵士が医療技術の粋を尽くして生還したという奇跡のよう

なニュースがあり、息子もまたその奇跡の恩恵に浴するのではないかと僅かな期待を持っていた。
　しかし、戦場は小惑星帯を離れて火星近傍に移り、戦火を身近に感じてみると、息子と遠く隔てられたという意識になる。息子の生存を信じる心に亀裂が生じている。そんな二人の背後に、いつの間にか、二人を眺めるようにアランがじっと立っていた。
　ティムの部屋で、エリートアランはベッドの端に並んで腰掛けて、二人はティムの思い出を共有した。エリーが切り出したのは、突然の別れ話だったが、アランは泣きもせず、悟っていたように言った。
「エリーにだって、大切なお父さんやお母さんがいるもんね」
「そう、今は両親の側にいてあげたいの」
「でも、離れてしまったら、ボク、エリーを守れなくなっちゃう」
「ありがとう。今まで私を守ってくれていたのね」
「そう、ティムとの約束なんだ」
「そんな約束をしていたの？」
「これ」
　アランがベッドの下から取り出してエリーに差し出したのは宝物にしているアスカである。アランにとって兄の形見とも言えるだろう。
「ティムからもらった大事なものでしょ」
「いいんだ。ボクはそのうち本物に乗るから」
「あなたがアスカに乗るのが平和な時代でありますように」
　エリーはそう祈った。
「私は思うの。百年前も、二百年前も、もっとずっと昔も、人はきっとこんな会話をしていたのね。誰かを愛して、誰かと別れて、、、でも、誰かに何かを遺して思いを継いできたのね」
　アランと母親はエリーが帰る日にバス停まで見送ると約束した。その夜、アランはいつもの時間にベッドに横になったが、目がさえて眠れない。ティムの部屋にアスカの模型を取りに行こうと考えて、エリーに渡したことを思い出した。いつもアランの心を満たした物が無く、空っぽになった心に様々な疑問が入り込んでは次の疑問に押し出されるように消え失せた。どの疑問にも回答は得られなかったが、ふと、展望室の老人たちの姿が浮かんだ。あの老人たちならば。
　思考ロボットのダニーは黙ってアランを見守るように声はかけず、アランが安らかな眠りにつくように空調に気を配っていた。明くる日の学校は休みである。就寝がやや遅くなっても差し支えはあるまい。

　朝、逼迫するエネルギー対策のために居住区外へのエネルギー供給を制限するとのニュースが流れていた。何となく予測された出来事に、家族は当然のように受け入れていた。シャッターが設置された遊歩道を抜けて展望室に入ってみると、ぶるっと身震いする程、肌寒い。アランは朝のニュースを思い出した。公園の気温が下げられているのである。
　そんな状況に出はなく、アランは首をかしげた。マレンゴ爺さんの横にミッシェルの姿を見つけたのである。額に付けているゴーグルは彼女が見聞きした事柄を記録するためのものだ。アランは優等生の彼女が何かの調べ物のためにやって来ているのだろうと見当を付けながら、マレンゴを挟んで左側に腰掛けた。しかし、今のミッシェルとの人間関係を考えると声をかけにくい。顔見知りであるが故にぎごちなさを生じ、その雰囲気に耐えかねたようにミッシェルがアランに言った。
「ママが、お年寄りの人たちに聞けば、町のことがもっと分かるはずだって言うの」
「ボクもそう思うよ」
　ミッシェルはとまどうように視線をそらして短く言った。
「ごめんなさい。この間は言い過ぎたわ」
　この勝ち気な少女が謝罪する理由が分からず、アランは再び首をかしげたため、ミッシェルは詳しく説明せざるを得ない。
「馬鹿ね。『大っ嫌い』って言ったことよ」
　老人たちは二人を眺め、マーが二人に語りかけた。
「火星歴元年のことは？」
「私、知ってる。ジュディ・マグガイアが生まれた年よ」
「その通り。神さまが生まれた日でもない。神さまが宇宙を作った日でもない。この火星で初めて赤ちゃんが生まれた年だ。当時の火星の人口はたった８８人だったそうだ、この大地は私たち人類と歴史を作っている」
「嫌な歴史」
　ミシェルがそうつぶやいたのは、戦争の影を感じているからに違いない。マレンゴ爺さんが語った。
「いいかい、子どもは戦争の犠牲者だなんて言うけど、鵜?みにしちゃいけない。犠牲者ではあるが、君たちは第三者ではなくてこの社会の一部だ。成り上がりの親が図に乗って大きな借金をこさえちまったが、息子のお前たちは誇りを持って社会を支えてくれると信じてるよ」

「それは、火星のこと？　それとも、地球のこと？」
　子どもたちは老人たちが見上げる空を眺め、アランがぽつりとそう聞いた。
「その２つが、分けられるものかね」
　老人たちの言葉にアランのミッシェルは顔を見合わせた。この時、アランは目の前に広がる景色に気づいた。
「お婆ちゃん、雪が･･･」
　アランは祖母に優しく声をかけた。窓の外の闇を背景に白く、時に光の加減で桃色や薄紫にも見えもする。アランは雪が光を反射して無数に光が降り注ぐ光景を、お婆ちゃんだけではなく、この展望室の老人たち全てに観て欲しいと思った。
　もちろん、地球で目にする雪ではない。この都市の排気口から出る多量の二酸化炭素の一部が微細な液体のまま排出される。日が沈んで急激に気温が低下する時間帯に、その粒子は大気に蒸散しきれず、気化熱によって更に冷やされて、固体になったドライアイスの粒子が凝集して雪のように降り注ぐのである。この美しい景色は、火星の自然と人類の都市が作り上げた光景である。この現象が風のない早朝に起きれば朝日が映えて美しい薄紫のオーロラにも見える。
　老人たちはアランに地球の自然の美しさを飽きずに語って聞かせた。アランは老人たちの話に相づちを打ちつつも、口に出せないわだかまりがある。目の前に広がる荒涼とした大地と人の生存を許さない厳しい自然を観れば、美しい地球という老人たちの思い出に反論しがたい。しかし、老人たち目が思い出で曇って、子どもを育んだ大地の美しさを感じることが出来ないのはどういう訳だろう。それがアランには面はゆいのである。一方、戦時下の火星で語られることが多くなった愛国心と言う言葉もまたアランには違和感を持って感じられる。彼の心にあるものは生まれ育った大地を美しいと感じる感性である。
　この美しい景色に無反応な祖母に、アランはため息をつき、マレンゴ爺さんを見上げて言った。
「お婆ちゃん、全部忘れたのかな。もう、何も分からないのかな」
　お婆ちゃんがぼけたと嘆くアランに、マレンゴ爺さんはふと微笑んで立ち上がった。マレンゴはサマンサの前に立ち、静かに一礼をして手をさしのべた。惚けたはずのサマンサもその意味を理解して手を添えて立ち上がり、二人は静かに踊り始めた。ワルツのメロディを連想させる美しい踊りが背後の雪景色に映えた。頭の中の記憶は失っても、体は昔のリズムを覚えていて、お婆ちゃんの足取りは確かで動きに戸惑いがなかった。
　アランはその姿が綺麗だと思った。ふと手を握る感触に気づいてみると、ミッシェルの手が優しくアランの手に添えられていて、彼女は暖かい笑みでアランを包んでいた。

ミッシェルもまたアランと同じ意識だったに違いない。
　お婆ちゃんと共に帰宅したアランが母親に報告した。
「ママ、お婆ちゃんがダンスをしたの」
「しっ、静かに」
　マーガレットは大声で喜びの声を上げる息子を叱責し、ニュースに耳を傾けた。
【タルシスＴＶより臨時ニュースをお伝えします。接近中の敵機動部隊の戦力は現在までに判明するもの、高速フリゲート艦６隻を基幹とするとのことです。火星攻撃圏内にはいるのは明後日未明になるものと思われます】
　敵機動部隊接近の報は、火星の人々に直の戦火に晒されるという恐怖と混乱を植え付けた。火星解放軍の勇まし気な発表にも関わらず、人々は既に火星には連邦軍のフリゲート艦に抗し得る軍艦はないだろうと推測している。衛星軌道上に数百隻のアスカで編成された防衛隊が迎撃することになるだろう。小さなミツバチが巣を襲うスズメバチに抗するように、その身を食いちぎられながら戦う凄惨な戦況になるに違いない。
　それを予感したように、その日の夕食後に、担任の教師から学校が明日休校になるとの連絡が入った。いつもと違う雰囲気に子どもたちにも不安が広がっていた。

「今日は、一日中家にいなさい」
　早朝、息子の顔を見つけたマーガレットは、昨夜、命じたことに念を押した。ただ、アランはそれに反駁した。
「ママ、お婆ちゃんがいないよ」
　マーガレットは息をのんだ。義母が姿を消したとすれば、行く先はおそらく展望室である。アランもそれを察して言った。
「ボク、展望室にお婆ちゃんを迎えに行ってくるよ」
　マーガレットは息子の提案に一瞬考え込んだ。息子一人で行かせるには不安があり、かといって、自分が迎えに行くのも、家に一人残る息子が気がかりだった。彼女は決断を下した。
「いいわ。二人でお婆ちゃんを迎えに行きましょう」
　数分後、思考ロボットのダニーが乗り移ってコントロールする自動車が二人を公園に運んでいた。公園前まで約１０分の距離である。後は徒歩になる。母子は車を降り、街の喧噪に身を晒した。喧噪をかき消す程大きく警報が響き渡る。
　人々は警報に首をかしげた。軌道上で戦闘が起きるという外れようのない予感があった。しかし、この町に直接の危険を知らせる警報が鳴るとは思わなかったのである。警報に続いて、その理由が各所のスピーカから市内に流された。
【市の保安局より市民の皆さんに緊急通達です。
　軌道上の戦闘において損傷した友軍機が炎上しつつ墜落中です。大気中で爆発した機体の破片が降り注ぐおそれがあります。市民の皆さんは、至急最寄りの避難場所に移動してください。これより第一種警戒態勢に入ります。隔壁付近に居られる市民はシャッターに注意してください。これは訓練ではありません。市民の皆さんは落ち着いて行動してください。】
　都市の強靭な外壁も、宇宙空間から落下する破片の直撃に耐えることは出来ない。もし、外壁が破壊されれは、町は人の存在を許さない環境になる。不測の事故に備えて町の各所に緊急用のシェルターがあり、この種の警報と共に普段は目立たないシェルターの案内板の文字が明滅してその存在を知らせていた。シグナルの異なる警報がし、町の区画を隔てる巨大なシャッターが閉じ、祖母を迎えに行く母子の行く手を遮る。
　二人は展望室に沿って伸びる通路にたどり着いた。展望室との間を遮る壁面にある大きな窓から中が見える。通路の突き当たりを抜ければ展望室の中である。周囲の人々の不安や恐怖の感情に包まれ、悲鳴や家族の名を呼ぶ声に耳を貫かれながらも、アランの

心は祖母の元にたどり着くことが全てで、冴え渡っていて濁りがなかった。前方のシャッターが閉まりかけているのだが、全速で駆ければその隙間を抜けられそうだった。
「危ない」
　降りてくるシャッター挟まれる危険を察知した母親に、アランの体は背後から抱き留められ、アランの目の前で、シャッターは空気の出入りさえ許さない程、重々しく立ちふさがった。衝撃に足下が揺らぎ、轟音に鼓膜を貫かれたのはこのときである。アランがよろよろと立ち上がって窓から中を覗くと、展望室の外壁に巨大な破孔と亀裂が入っているのが見えた。分厚い壁面は中の音や悲鳴を伝えなかったが、窓にくっつけた額に窓から伝わる振動が、大地が展望室から空気を奪い取る激しさを伝えた。空気と共に舞いながら吸い出される人影の幾つかに、記憶があるように思えたが、その人物の名は判然としなかった。マーガレットはアランを背後から抱いて視界を奪い、この残酷な景色から子どもを守った。
　古い都市は、居住区やエネルギー区、生命維持システムなどの機能をもつ巨大な六角柱のモジュールを増築しつつ、まるでミツバチが巣を拡張するように都市を広げた。その時期の町には墓地という余裕はなく、この大地の上で亡くなった人々は凍り付いた大地に穴を穿って埋葬された。都市が巨大なドームで覆われる構造に変化するにつれて、墓地も都市の一部に収まった。もとは様々な信仰や民族の血筋を有する人々だが、この星を故郷と思い定めつつも、街の外の凍り付い大地に肉親を埋葬するのに抵抗を感じていたに違いない。
　展望室で亡くなった老人たちの合同葬儀には町の偉い役人や町に常駐する徴兵係の軍人が弔辞を述べたが、参列者の誰もそんなものを聞いては居なかった。夜空を仰ぎ見て地球のことを思い続けた老人たちの体は、この大地に葬られたのである。
「お婆ちゃんの事は大丈夫。パパとティムが待っているから」
　マーガレットは息子のその一言で、以前から弟が兄の死に気づいていたことを知った。アランは気丈な母が跪いてすすり泣く姿を初めて見た。彼はその涙が悲しいとは思わなかった。むしろ、背負い続けた重荷を吐きだして、母の心が身軽になったことが嬉しく、彼は兄の言いつけを守って母親に寄り添った。
　葬儀の後、遺族たちは未だに修復の見込みの立たない展望室への入室が許された。壁面が破壊されて気温や気圧は外気と変わりがない。もちろん、大気に素肌を晒す事などかなわず気密服着用の上のことである。巨大な破孔から全てが吸い出されたのを物語るように残された人口物が破孔に向かって靡く中で、ヒマラヤスギはしっかりと根を張って揺るぎない。しかし、その幹を叩けばカンカンと高い音を響かせる程に凍り付いていた。

祖母が亡くなり、エリーは去った。母親は長男のティム死を受け入れた。この町で一つに形作られたものがバラバラになって時と空間の中に拡散する。
アランが見上げるものはもちろん天空に浮かぶ地球である。夜空に気を取られるアランの足下でこつんとつま先に引っかかるものがあった。高温に晒されて変色しているが、この町の外壁と類似した素材だと分かった。砕け散ったアスカの外板だろうと思った。アランは、そっとその夢の欠片を機密服のポケットにしまった。
アランは母親に寄り添った。ただこの一瞬だけは母親を支えていられるように。ただ、その瞳に失望感は無かった。
（お婆ちゃんたちはちゃんとあそこに帰れたのかな）
様々な人の思いが交錯する大地の上で、じっと未来を見据えるような視線の先に、人々の思いが綴られてゆくのである。

了

アスカ物語　～夢のかけら～

http://p.booklog.jp/book/75892

著者：塚越広治
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/ken19570420/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/75892

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/75892

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ